中学校家庭科における授業研究

和歌山大学教育学部：村田順子（研究代表）・今村律子・山本奈美
和歌山大学附属中学校：川嶋径代
智辯学園和歌山中学校：西岡真弓、那智勝浦町立那智中学校：松本年絵
那智勝浦町立下里中学校：浜敬子、岸和田市立野村中学校：中内昌恵

1. はじめに

本課題は、中学校家庭科教員が授業研究や情報交換を行う場を構築することを目指し、複数の中学校教員と連携し継続的に取り組んできている。本年度は、コロナの緊急事態宣言発令により現場への訪問が困難となり予定していた授業見学・研究協議などが中止になるなど、当初の計画通りに研究が進まなかった面もある。その中で、実施した活動について報告をする。

2. 活動報告

（1）附属中学校「令和 3 年度研究協議会②」参加（和歌山大学附属中学校）

10 月 29 日（金）に実施された附属中学校の研究協議会に教員 2 名が、中等家庭科教育法 B の受講学生 2 名と共に、家庭科の公開授業を参観、研究協議会に参加した。

授業は、学習指導要領「A 家族・家庭生活」の「（2）幼児の生活と家族　イ幼児とのよりよいかかわり方について考え、工夫すること」にあたる内容で、近隣の幼稚園児とのふれあい体験実施に向けて、幼児の発達段階に応じた生活や遊びの特徴から幼児とどのようにふれあえばよいかを考える授業であった。授業担当教員が事前に幼稚園を訪問し、タブレットで撮影した 3 歳児、4 歳児、5 歳児それぞれの遊びの中での特徴的な様子をスクリーンに映し出し、年齢によって異なる幼児の言動や振る舞いなど気づいたことを班のメンバーで共有し、生徒が各自、園児への対応の仕方を考えた。

学生は授業を参観することで、実践授業を実施するにあたっての教員の準備作業などを知ることができ、また協議会では訪問先との関係づくりなど、教員になった際に直面する様々な課題や不安について直接授業者に質問することができた。このようなことは、大学の講義だけでは知ることが出来ないので貴重である。附属中学校教員との連携を学生の学びに役立てることができた。

（2）中学校家庭科における「防災」授業の提案（智辯学園和歌山中学校）

家庭科における「防災」授業は、2019 年度以降、西岡先生が開智高等学校で「My防災ハンドブック」作りを通して防災を考えさせる授業として計画・実践してきたものである。今年度は、高等学校での授業実施に向けて学部教員は助言を行い、授業参観および協議を行った（表 1）。高等学校での授業実施ではあるが、中学校でも実施可能な内容となっている。授業参観には、来年度から中学校教員として採用された学生も参加した。

近年、大規模な自然災害の被害が増える中、「防災」についての学習は、各学校段階での教科、総合的な学習の時間、学校行事等さまざまな教育活動の場面で行われている。そのような状況下、中学校家庭科で「防災」の授業を行う意義は以下のとおりである。

今年度から実施されている学習指導要領改訂に伴い、住生活の内容（B（6）住居の機能と安全

表1　2021年度取り組みの日程

期間	内容
8月～12月	課題とする授業内容の検討。 指導計画・指導案の作成。 随時、大学教員からの助言を受ける。
9月～11月	開智高等学校中等部5年生（4クラス）、高等部1年生（4クラス）での実践
12月～2月	智辯中学校3年生（5クラス）での実践

な住まい方）で、自然災害への備えについての記述が詳しくなったこと、教科書の「防災」に関する文章や図・写真が増えたことなど、以前より「防災」が重視されている実情がある。

加えて、中学校家庭科での「防災」授業は、学習指導要領の家庭分野目標に示されている「生活の営みに係る見方・考え方」の視点のうち、「健康・快適・安全」および「協力・協働」の視点から、災害前に十分な備えをしておくことや災害が起こった時に最善の行動ができることなど「生活を工夫し創造する資質・能力」の育成につなげられる題材である。

また、「防災」授業は、小学校や中学校の家庭科でこれまで身につけてきた衣食住生活、家族・地域についての知識・技術を生かし、災害時という困難を乗り越えるための実践力をつける題材であるので、中学校段階でのまとめの授業として位置づけることも可能である。

1）指導計画

昨年度は中学生向けに内容を一部わかりやすく変更し、智辯中学校でも実施した。今年度は昨年度の５時間編成に防災バッグの中身を考える授業を１時間追加し、6 時間で計画した。「防災」授業（各小題材は 1 校時 60 分で行う。全 6 時間）の指導計画を表 2 に示す。各小題材で1枚のワークシートに自分の考えや要点をまとめ、6 時間目にすべてのワークシートを冊子「My防災ハンドブック」に綴じ、学習全体をふり返って防災への決意を書くという計画ですすめる。

さらに、各自が防災について学んだことを生かしてテーマを設定し家庭実践することを冬期休暇の課題とする（表 3）。中学校は冬期休暇の時期が学習の途中になるため、自分専用の防災バッグを準備することを課題とし、3学期の学習につなげる。

表2 指導計画

小題材名	学習内容	中学校家庭科の内容	小学校家庭科の内容
1. 物と知恵で乗り切る災害時の衣生活	避難所での寒さをしのぐ方法 断水時少ない水で洗濯をする方法 避難時に適する服装		衣服の主な働き 日常着の快適な着方 日常着の手入れ
2. 災害に備える食生活	ローリングストック法による備蓄 災害時の献立での注意点	用途に応じた食品の選択	体に必要な栄養素の種類と働き
3. 地震に備える住まい	地震の被害を少なくするための方法 避難する場合の注意点	家族の安全を考えた住空間の整え方	
4. 防災バッグの中身を考えよう	**避難時や避難所で必要な物 季節や個人に応じた物の準備**		
5. 自助・共助・公助	自助・共助・公助の意味 家族・地域との協力の大切さ 災害用伝言ダイヤルの使い方	家族の協力 家庭生活と地域、高齢者とのかかわり	
6.「My防災ハンドブック」 私の防災への決意	避難に関する表示 災害時の調理、災害時のトイレ 津波避難の3原則		米飯の調理

※網掛けは、参観した授業

表3 実践課題「防災に関する家庭実践」

- ●自分専用の非常持ち出し袋を作る
- ●自分の部屋を地震に強い部屋に
- ●家族が安心して過ごせる部屋へと改善
- ●我が家のローリングストック
- ●災害時の食事作り体験
- ●ハザードマップで避難経路の確認
- ●災害用伝言ダイヤルの体験
- ●家族で防災について話し合う

※上記を参考に1～2のテーマを設定し実践

2）授業実施・協議

小題材「防災バッグの中身を考えよう」の授業実践に向けて、授業者と学部教員との間で意見交換を数回メールで行った。10 月 29 日（金）2 限に開智高等学校 1 年生に対して実施された授業を学部教員 2 名が参観し、授業後に協議を行った。授業の学習指導案を表 4 に示す。

本時のねらいは、避難所での生活を想定し、優先順位を考えながら防災バッグの中身を適切に選ぶことができ、防災バッグの必要性がわかることをねらいとしている。バッグの中身は、①命を守るためのもの、②快適に避難生活を送るための物、③安心や心の安定を得るための物に分けて考えさせた。生徒たちが個々に考えた後、グループで話し合

い意見をまとめ、タブレットを用いて発表をした（写真1、2）。授業を受け、防災に対する意識が高まったり、共助の意識から防災を考えたりすることが出来るようになった生徒もいた。

授業後の協議では、中に入れる物の①～③の区分の必要性について、物の分量などの理解のさせ方、生徒の意見に対する授業者の補足説明についてなどが話し合われた。

表4 学習指導案

小題材名　「防災バッグの中身を考えよう」（題材「My防災ハンドブック」6時間扱いの4時間目）

本時のねらい：避難所での生活を想定し、非常持ち出し品の優先順位を考えて防災バッグの中身を適切に選ぶことができ、防災バッグの必要性がわかる。

段階（分）	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 （5）	これまでの学習を振り返り、本時のめあてがわかる。	持ち運びしやすいサイズ・重さの防災バッグにするために、優先するものを考えることが大切であることをおさえる。	
展開① （15）	避難所での生活では、どのようなことに困るかを考える。 自分が防災バッグに入れたい物を、思いつくだけ挙げる。 【方法】ロイロノートのシンキングツールに①命を守るための物（ピンク）、②快適に避難生活を送るための物（グリーン）、③安心や心の安定を得るための物（ブルー）に分けて記入する。	実際の避難所の写真や被災者の声から、避難所での生活をイメージさせやすくする。（中学生は冬期課題で防災バッグに入れた物を思い出させる）防災バッグ準備の時期は今の季節くらい（秋～冬）とする。 避難所での生活が1週間程度続くかも知れないことや、2日目には水や少量の食料配給が始まることが多いことも考えに入れるようにさせる。 ※ロイロノートが使えない場合は、ワークシートに記入させる。	防災バッグの中身について主体的に考えようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】（観察）
展開② （30）	●話し合い（15分） グループで各自の考えを共有し、「優先する10点」を決める。 【方法】全員が同じ内容になるよう表を修正する⇒代表者のみロイロノートの提出箱に提出する。 ※ロイロノートが使えない場合は、話し合い記入用紙に意見をまとめて記入する。（付箋を活用し、書き換えや分類の変更をしやすくする） ●発表（15分） 代表者がグループの意見を発表する。	「優先する10点」は、誰しもに共通する物として話し合わせる。 発表した10点のうち注目すべき点について、なぜそれを選んだかなど補足説明をさせ、その必要性が全員にわかるようにする。	
まとめ （10）	各自、プリントに防災バッグに入れたい物を記入する。 防災バッグを準備しておくことで何が変わるかを考える。	最終的に自分が選んだ「優先する10点」と、追加して入れたい物を記入させる。 季節や個人、家族（幼児や高齢者、ペットなどがいる場合）によって必要となる物が変わってくることを伝える。 自分の考えが授業によってどのように変化したかを振り返させる。 避難時に慌てず心に余裕がもてることや、避難までの時間が短縮できること、避難所での生活を日常に近づけることができるなどの良い点に気付かせる。	「優先する10点」の選定について工夫している。【思考・判断・表現】（ワークシート） 防災バッグを準備する必要性について理解している。【知識・技能】（ワークシート）

3）授業の効果および課題

今年度初めて「防災バッグの中身」を考える授業を行い、授業者の印象として昨年度までと一番変わったことは、生徒たちが災害時の生活や避難するときの状況を具体的にイメージしながら学べたことであった。グループでの生徒の発言や授業後の感想等にそのことがあらわれていた。防災バッグの中身を考える際「優先する10点」に限ったことが、個人やグループでの話し合いの中で、なぜそれらが必要かについて深く考えることにつながったのではないかと考える。

クラス内での意見の共有については、高等学校ではタブレットにまとめた意見をプロジェクターに写したり生徒のタブレットに配信したりして発表をさせたが、発表内容が残らないため、他のグループとの比較や授業後の振り返りがしづらいという点が課題となった。その後行った中学校の取り組みではタブレットを用いずに各グループがまとめた「優先する10点」を黒板に書かせて発表させたところ、各グループの意見を見比べながら違いや共通点を把握することができた（写真3）。時間的にも高校、中学校で大きな差が無く実施できたので、来年度以降は後者の方法で実施したいと思っている。ICT 教育の推進が求められているが、効果的な使い方を考えていく必要がある。

写真 1　タブレットを使用した班での話合いの様子（開智高等学校）

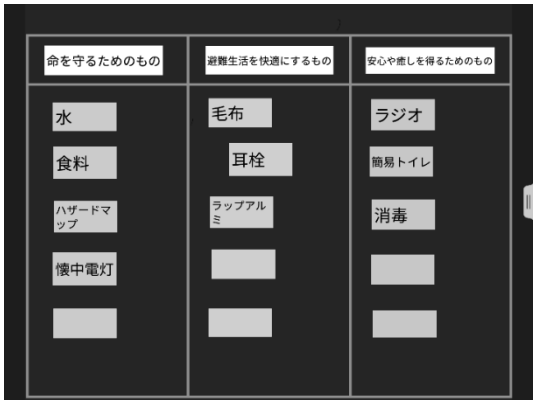

写真 2　グループ発表のタブレット画面

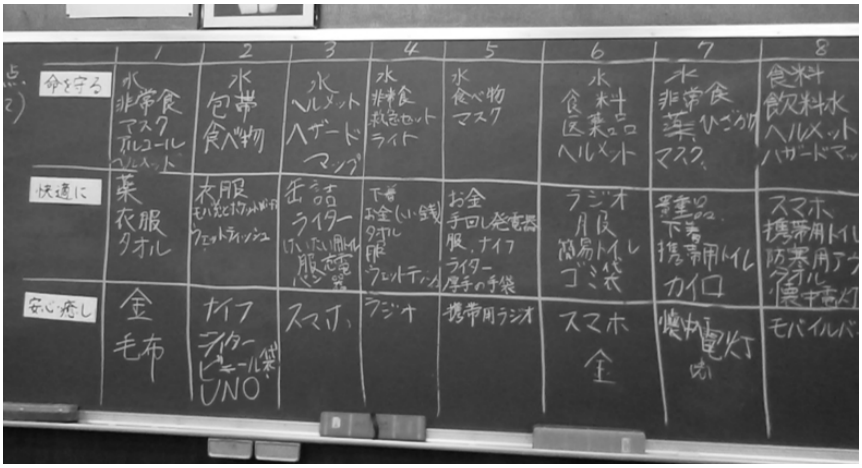

写真 3　板書
（智辯学園和歌山中学校）

3. おわりに

昨年に引き続き今年度も、コロナの影響で活動が制限され思うような活動ができなかった面もあるが、共同研究者の先生方のご協力のおかげで、学生を伴っての授業参観を実施させて頂き、連携事業を学生の学びに活用することができた。参観を許可していただいた学校関係者にも感謝を申し上げたい。

来年度以降もコロナの影響が残ると考えられるが、情報交換や家庭科の各分野の授業内容の検討を行うなど家庭科の授業の充実に向けて活動ができればと考えている。また、実際の授業を学生に見せたりする機会を頂いて、研究の成果を学生に還元していきたいと考えている。

「非常持ち出し袋の中身」を考えよう！

3年（　）組（　）番　氏名（　　）

1．避難所での避難生活で困ることはどんなことだと思いますか？

2．非常持ち出し袋に入れる物で、すべての人にとって優先する１０点は何だと思いますか？
理由は一番該当する１つに〇をつけましょう。

	最終	入れる物	理由（１つに〇印） 命を守る	避難生活を快適にする	安心や癒しを得る
優先する10点（自分の考え）					
（他の人の考え）					

Q１　優先する 10 点は、どのように考えが変わっていきましたか？

話し合いをして	発表を聞いて

Q２　防災バッグを準備しておくことで何が変わると思いますか？

図 1　ワークシート（智辯学園和歌山中学校）